

globetrotter の捉え方：中野明氏の『グローブロッター』に対する書評として

立岡裕士

(キーワード：グローブロッター, 旅行記, 明治)

1 はじめに

中野明氏の『グローブロッター』(中野, 2013)は, 19C 第4四半期に簇生した globetrotter と呼ばれる人々の旅行(記)を素材としたもので, その点興味深い。しかし行論にはいくつもの瑕疵が見られるだけでなく, 分析自体が不毛な結論に終わってしまっている。以下では本書¹⁾に対する批評を中心として, globetrotter について考える端緒としたい。なお globetrotter の訳語として通常使われている「世界漫遊家」は意に満たないところがあるが他に適当な訳語も見あたらず, またカナ書きでは冗漫なため, 本稿では引用の場合を除いて原語で表記する。

2 根本的な難点

(1) 史料

分析に先立つ根本的な問題点として, まず検討した史料の全体が明示されていないことが挙げられる。ここで「全体」というのは二つの意味がある。すなわち, 本来の検討対象として利用する明治期の globetrotter の旅行記の集合(以下 A')と, それを選定するもととなった明治期訪日者の著作の集合(A)とである。後者の一部は p. 253のグラフ「日本関連旅行記の年代別出版点数」を算出するのに用いられた史料の「一覧」として web 上で公開されている。しかし「今回の執筆に当たり目を通したもの」(p. 254)というものの, 第9章注3において自ら述べるように大正期以後に刊行されたものは掲出されていないので, A 全体は明らかになっていない²⁾。そして「一覧」には何の指示もないため, そのうちのどれが A' に該当するかも明かでない。

A から A' を選定する基準は次のように示されている: すなわち, フィクションを交えたもの (B)³⁾・「旅行目的以外で日本に長期滞在」(p. 16)した者の記録 (C) は除外する(ただし C は後述の付随目的のためには参照する)。また「旅の記録ではなく, 日本の歴史や文化, 生活に焦点を合わせたもの」(p. 16) (D)・「国賓扱い」(p. 17)の訪問者の記録 (E) は除外しないが副次的史料とする(実際には C・D の除外はすでに「一覧」を作成する段階で適用されている)。これら B~E の判定は中野氏が行うものであるから, それらの判定の具体的基準と, 判定結果とについて妥当性が問われねばならない。特に C は「長期」という曖昧な表現が用いられている。実際, 僅かに示された具体例 (p. 17)のうち, Weston を C に含めて除外しているのは不適切ではなかろうか (Weston は宣教師として来日したのではあるが, 1年で辞職し, その後の4年間は登山家として滞日していた(青木, 1997)からである)。B についてもどこまでフィクションを認めるのか(そもそも記述の真実性をどのようにして判定するのか), E に関してもどこまでを国賓「扱い」と見なすのか⁴⁾。

史料を呈示していないことは, 本書の目的からしても不都合である。本書の目的は pp. 14~16に主目的および二つの付随目的として示されている。すなわち主目的は①globetrotter がいかに旅行したかを明らかにし, ②さらに多様な globetrotter の類型を帰納的に定義することである(中野氏はこのように明示的に区分してはいないが, 行論の都合で番号を付した)。付随目的は (1) globetrotter に明治が「いかに映ったか」(p. 15)を明らかにすること, (2) 旅行先としての日本が明治年間にいかに変容したかを明らかにすること, である。主目的①や付随目的(1)のためには事例を示せばよいのだから, 対象とすべき史料の全体を把握する必要はない(もとより, 全体像が不明であれば特異例を一般的事例のように思い込む危険はある。そしてこの危険は, 付随目的(2)のように比較をするためには大きな問題となる。ただしこれも変容を事例的に捉える限りでは致命的とまではいえまい)。しかし主目的②のためには(さらに①が単なる事例の呈示以上のことを意図しているのであれば, ①の

ためにも)、対象の全体像を把握することは不可欠である。それが現実的には不可能であるとしても、少なくとも検討した史料の全体を示さねば、本書の結論の妥当性は検証不能となってしまう。

史料の一覧を示していないことはより実的な点でも問題である。すなわち、本書では引用する旅行記について、初出の箇所での書誌を注記し、以後は「前掲」という形式で引用・言及している。この方式を誤りということはできないが、同じ旅行記が章を超えて利用されることがある本書では、読者にとってきわめて不親切な方式である。独立した引用旅行記の一覧表を作り(各旅行記には通し番号を付し)、旅行記への参照はその番号を用いるようにすれば、はるかに読みやすかつたであろう。しかも本書の方式は著者にも不親切であった。第4章では注17に示したコトーの旅行記を注16で「前掲」扱いするという誤りを犯している(この注で、同書の翻訳に誤りが多いことを指摘しているのは皮肉である)。逆に、第5章注12では第2章注19で挙げた旅行記を初出であるかのように掲出している⁵⁾。

(2) globetrotter の定義・分類

史料選定の問題は globetrotter の定義とも関連する。中野氏は globetrotter を自明視し、「世界のあちこちを頻りに旅行する人々」(p. 10) という以上には明示的に定義しようとし⁶⁾ない。しかし本書が、明治期に日本を訪れた欧米人の体験記全体を対象とするのではなく、あえてその一部を globetrotter の旅行記として摘出しようとするのであるから(そしてそれをもとにして globetrotter 一般の分類を試みるのであるから)、前節で論じた史料の性格に対する判断問題とは別に、それらが globetrotter の旅行記として妥当であるか否か、globetrotter の明示的な定義・規準に照らして判断されねばならない(換言すれば、前節で論じた A' が過不足なく globetrotter の旅行記であるか否か、ということである)。この定義を明示していないことは中野氏の根本的な誤りである。しかし問題はそこにとどまらない。globetrotter の定義を自明視した中野氏はその定義を自覚的に検討しなかった。その結果、以下に示すように、彼が無意識裡に採用した定義は大半の globetrotter を擬似的なものとして排除するという奇矯なものとなるとともに、他方でそうやって排除したはずの旅行者を別の箇所では globetrotter として扱うという矛盾をきたすことになったのである。

まず中野氏は前節の除外条件 B によって、「旅行目的以外で日本に長期滞在」(p. 16) を globetrotter と見なしていない。この規定は、短期滞在であればさまざまな目的で旅行する者は globetrotter と見なしているように見えるが、実際は、滞在の長短に関係なく旅行目的以外の旅行者を除外することが含意されている。「目的が旅とかけ離れるほど、彼らのことをグローブロッターとは呼びにくくなる」(p. 295) とするからである。

次にすなわち中野氏は、Satow の旅行記を「グローブロッターの記録として扱うのは無理があるだろう。なにしろサトウは、決して自分自身をグローブロッターと定義しないに違いないからだ(彼ならば自分自身を外交官と定義したはずだ)」(pp. 16~17) という(同様の記述は pp. 325~326 にも見られる)。ここには二つの規定が含まれている。すなわち、globetrotter は自認によるという規定、および globetrotter とは「外交官」などと対比されうる職業であるという規定である。中野氏は当然のことながら、この二つの規定が(常に矛盾なく)当時の人々に共有されていたか否かという問題に考えおよんでさえいない。しかしたとえこの規定が妥当だとしても、過去の人物についてこの規定を適用することが困難であることは確かである。上例の Satow にしても、中野氏は「違いない」というのみで、Satow が globetrotter と自己規定しないとする根拠を示しているわけではない。Satow よりも無名な多くの旅行者について、彼らが著作中で自分が globetrotter であることを明示的に肯定／否定してはいない場合、彼らの自己規程をどのようにして知るのか⁷⁾。職業を知ることはさらに困難である⁸⁾。要するに、中野氏が対象とした旅行記の作者の多くは厳密には globetrotter とは言い難いことになる。そもそも、ある人物が globetrotter であるか否かが簡単に判別できるのであれば史料の選定に際して先に指摘したような曖昧な基準を用いず、単純に A のうち globetrotter の著作、とだけ指定すれば済んだはずである⁹⁾(彼らの著作と比較するために globetrotter ではない者の著作も取り上げるにしても、それは事例として適宜選べばよいのであるから)。

プロローグにおいて以上のような定義を行っているにもかかわらず、第1章以降の叙述はそれと矛盾した形でなされる。まず「一覧」所収の文献を直ちに globetrotter のものとする(したがってそこに挙げられた旅行記を、他の根拠なしで利用すること)の誤りについては注9)で指摘した。次に、国賓となるような人物は Satow に倣えばおそらくは国王・王族・貴族・政治家・・・として自己規定するであろうが故に globetrotter にはならないはずである。にもかかわらず中野氏は、「あまりにも一般的なグローブロッターの旅からかけ離れたもの」(p. 17) という譲歩つきではあるが「王侯型グローブロッター」の存在を認める。さらに、「旅それ自体とは

異なる目的をもつ」者は globetrotter ではないにもかかわらず、第10章では彼らを globetrotter と呼び、4種に分類することまでしている。globetrotter と行動の違いを比較するために彼らを取り上げることが必要ならば、始めから globetrotter と呼ぶべきではない。しかるに「いまのところ彼らをグローブロッターの一員として扱っておきたい」(p. 295) とか「グローブロッターか否かといった議論はいったん棚上げに」する (p. 311) などと述べて、いたずらに混乱をきたしている。

中野氏が本書後段で試みる globetrotter の分類は、再び暗黙の定義に依拠している。まず彼は globetrotter を「旅それ自体」を目的にする者と「旅それ自体とは異なる」目的をもつ者とに分ける (p. 322など。ただし後者は精確には、旅それ自体以外の唯一の目的をもつ者と呼ぶべきである¹⁰⁾。中野氏は明示的に区別していないが、両者の間に旅自体も含めて複数の目的をもつ者がいるからである。以下ではそれぞれ<旅自体><旅以外><多目的>と略称する)。すでに触れたように、<旅以外>派の旅行者は globetrotter ではない。なぜなら<旅以外>の目的「の方向を追究する人々が自身のことをグローブロッターとは呼ばなくなる」(p. 325) からである¹¹⁾。「第三者の目には彼らはグローブロッターとして映る」が、<旅以外>を志向する旅人は「きわめてグローブロッター的であるにもかかわらず、グローブロッターではないという逆説的な現象が生じる」(p. 326)。したがって、globetrotter は<旅自体><多目的>の2種類となる。そしてこの両者は価値的に序列づけられている。なぜならば「掲げる目的は明瞭で単純な方が達成の可能性は高まり、しかもそのハードルがそれなりに高ければ、それをクリアすることで高い満足度を得られる」(p. 289) からである。globetrotter が旅以外の単一目的をもつことは定義上ないので、<旅自体>を志向する globetrotter が<多目的>な者よりも常に価値が高い。実際後者は「不幸なグローブロッター」と呼ばれる (p. 326)。しかも<旅自体>派のなかではハードルが高い方が価値が高いので、冒険旅行をそれ自体のためにのみ行う専門家が真の globetrotter だということになる¹²⁾ (ただし職業的旅行記作家は<旅以外>に含められる (p. 291) ので、どれほど冒険的であってもそもそも globetrotter ではない)。globetrotter は専門職業人だからこそ他の globetrotter には冠絶し、他者 (特に中野氏) を魅了し興味を覚えさせねばならない：「旅行記で興味を覚えなかったものは「あれもしたし、これもした」と記す。しかし結局特に何もしていなかったように見える。となると目的は一つでもいいからそれを完遂することを追究する。このような旅が人を魅了し、また旅する人の満足度を高める」(pp. 329~330)。また「「楽しみのため」といった曖昧な目的の旅は、第三者から見るとその他多くの旅のなかに埋没するありふれたものに映る」(p. 314)。

中野氏の globetrotter の明示的な定義は曖昧であった。これに対して、暗黙の定義は自己規定という主観的側面と職業という客観的側面とを組み合わせることで理念的には曖昧さがなくなった (歴史研究における操作性はほとんどないが)。ただし、主観的規定と客観的規定とが齟齬する可能性はある (本人は globetrotter を自認しているがそれを職としていない、逆に globetrott 業に従事していながらその自覚がない)。しかしより重要な問題は、中野氏の定義にしたがえば、冒険を職業とする人間が「非常に多くなり、特殊な階級と見なされるほど」になった (グリフィス, 1984, p. 20) と言われることとなるのであるが、それはありそうもなく、したがって中野氏の定義が現実から乖離していると言わざるをえない点である。

なお Netto (1888, pp. 213~215) が示した globetrotter の分類は戯文にすぎないが、これについて中野氏が誤解しているのが2点指摘しておきたい。まず、Netto は globetrotter の種として最初に番号を付して5種¹³⁾挙げ、さらに番号を付けずに4種を挙げている。扱いに差はあってもこれらはいずれも同格の種なので、「亜種」(p. 12注6)とする中野氏は誤っている。次に、Longfellow に関して「既存の分類枠を適用できない」(p. 83)「ネットー式では分類不能」(p. 84)としている。しかし Netto の分類は具体的な人間の分類ではなく globetrotter の分類なのであるから、2度目の来日が1度目とは違う形になったのであれば、2度目を1度目とは別の種に宛てればよいだけのことである。しかも中野氏は「王侯種」の意味を誤解している。王侯種の指標は軍艦に乗ることではない。貴顕の子弟が国内外に国威を発揚するために国家の代表として訪れるものである。もとより Longfellow は独立種並みに栄耀の場に紛れ込むだけの力を持つてはいるが、正式に派遣されたわけではない。所詮優雅種にとどまることは明白である。

(3) 本書の結論

すでに指摘したように、本書の主目的②は不毛な結果に終わった。しかしその結論を前提にすると、本書の主目的①や二つの付随目的は globetrotter の旅の実相を明らかにしようとするものではなかったことがわかる。すなわち、主目的①は訪日短期旅行者には、本書前半で取り上げた<旅自体>派、途中で取り上げた<多目的>派、最後に取り上げた<旅以外>派、の3種類があることを示すことであり、そして<多目的>派の増加にともなっ

て観光地としての日本の（希少）価値は低減したと書くのが付随目的ということになる。これらは旅行者の旅の実相を検討するまでもなく答える。globetrotterの旅の実相を検討するためには、長期滞在者の旅や日本人の旅とどう違うか、また globetrotter の旅が日本の旅行について論ずる史料として必然的であるのか（または少なくとも適当であるのか）といった点を検討すべきであるが、本書にそれが欠けている。しかし本書の目的にはそれで支障なかったわけである。

かくして、もはや総括すべきものがないため、本書のエピローグでは唐突に訓話が展開される。しかもその初めに、生産可能性フロンティアの図式が利用される。旅の満足度を論ずるのに無差別曲線ではなく生産可能性フロンティアを持ち出す理由は筆者には理解できない。もっとも、あくまで比喩に過ぎないのでさしてあえて咎めるには及ばない。この比喩によれば、「2財の生産は曲線内部のどこかにおさまリ、曲線上に位置する場合が最も効率的だということになる」（p. 322）。そして二つの目的を両立させることを目指す旅は、それぞれの目的の達成度は100%未満になる（p. 328）。ここまでは問題ないが、「そうした旅から最大の満足を得た場合、彼らの旅の満足度はよくて曲線上のどこかに位置することになる」（p. 328）という表現は不可解である。曲線上にある限り二つの要素は最も効率的に組み合されているのだから、なぜ「よくて」と言われねばならないのか。そして次のように述べるにいたって議論は崩壊する：10の目的について10ずつ達成できたとすれば「合計は単純計算で100だ。しかしこれは見かけだけで、その旅がある特定の目的のみについてこれ以上ない100を達成した旅よりも満足度が高くなるとは考えられない。旅の満足度は目的達成度の単純な合計では測れぬもの」（p. 329）である、と。まず旅の満足度は目的達成度の単純な合計では測れないという主張には根拠が示されていない。それを不問にしても、合計が意味を持たないのであれば、それは生産可能性フロンティアの否定である。

こうした支離滅裂な陳述の後、本書が最後に呈示しているのは「これはという一つの目的を達成せよ」「自分ならでは目的を完遂せよ」（p. 331）という人生訓である。本書のような作業の結果としてはあまりに陳腐であると筆者は考えるが、筆者の個人的感想は問題ではない。明らかなのは、この教訓は「グローブ Trotter たちの旅行記から得られ」（p. 331）たものではなく、彼らの旅行に対して中野氏が押しつけたものに過ぎないということである。この点で中野氏は決定的に誤っている。

なお、生産可能性フロンティアの議論のなかでは「快適さ」と「旅それ自体」という2軸を設定する（p. 328）ことまでしている。これは旅行の分類という二次的な目的からさえ全く逸脱したことである。中野氏の旅行観念は「快適さ」に絡んでも問題を含む。旅は「日常の快適な生活から離れるわけだ。したがって旅は本来的に不快適な要素を包含する。特に旅それ自体を目的にしてこれを徹底的に追究するならば快適性の追求はあきらめた方がよい」（p. 327）とするが、日常と旅とを単純な快・不快で比較しているのがまず誤りであろう。日常にも複数の快・不快の要素が存在すると考えるべきである（しかも、たとえば近隣の間人間関係を考えれば快・不快の「量」を単純に比較することすらできない）。そして一方的に日常よりも不快と見なされている旅行についても、避暑・避寒という旅を考えれば、快適さを求める旅がありうるししかもそれで満足が得られることを考慮せねばなるまい。

3 副次的な難点

①本書はこのテーマに関する先行研究に対する言及が全くない。また、旅行記からの引用に際しては基本的に辞典を明示している¹⁴⁾が、それ以外の事項（たとえばそれぞれの旅行者の経歴その他の情報）については若干の例外を除いて典拠を示さない。これは本書のような一般向けの図書に通例のことであるから、中野氏のみを咎めることはできないが、それでも難点であることに変わりはない。

②特に第7章（世界早回り）に関しては Bly や Bisland の記述を鵜呑みにせず細かに検討する必要がある。

もともと自己について語る旅行記には自己顕示・自己弁護の要素は現れやすい。特に Bly や Bisland のように競争として行われた旅行の記録は、成功であれ失敗であれ困難を強調しがちである。しかも著者がともに記者である以上、記事は真実性よりも売れやすさが重視されるからである。たとえば Bly (2008) の場合、汽船の連絡のために Colombo で5日間足止めされたように書いているが、内部徴証によって実際には3日間程度であったことがわかる。一方、出発命令が出されたのは出発前日ではなく4日前であることは Kroeger (1994, 第5章) が指摘している。

なお、世界早回りを取り上げるならば Train の旅行 (Forster, 2002) について触れるべきであった。また Layland が早回りを「念頭に旅に出た」（p. 124）というの、誤解を与える表現である。彼は、80日間で世界一

周することは可能だがそれでは何も見ることができない、100日もあれば僅かながらでも観光ができる、と考えたのであり、早回りをする意図はなかったからである (Layland, 2010, p. 1)。さらに現在の早廻りを取り上げるならば机上の計画などではなく、現実の体験である吉田 (2011) や近兼 (2011) を挙げるべきであろう。

- ③ Griffith が「1870年に来日して早々」globetrotter に言及したとする (p. 10) のは不適切な表現である。Griffith (1876, p. 339) の記述は確かに1870年に関わるものではあるが、この著書自体は1876年の刊行である。そうした旅行者が globetrotter と呼ばれるという文には現在形が使われていることから、それが執筆時の知識であって、1870年当時そうした用語が使われていたことにはならないと考える余地もある。ただし Griffith (1876) の記事では過去の叙述に過去形と現在形とが混用されており、この部分が執筆時での判断なのか歴史的現在なのか筆者には判断できない。ちなみに、OED に挙げられている globetrotter の最初例は Laird (1875) の書名である。しかし、Simpson (1874, pp. 4, 219) には “Glob-trotter” ・ “globe-trotter” が見られ、Webster や Randomhouse では初出を1871～1875としているが具体的な用例を示していない。
- ④ 一人旅に関して：中野氏は Bird が東北・北海道旅行にあたりガイドとして伊藤を同伴していること、さらに彼に強く依存していたこと、を根拠として Bird の旅は独り旅ではないと力説する (pp. 161～164)。Bird の旅が物理的な意味で独り旅でないことは初めから明らかで改めて指摘するほどの事実ではない。しかし、いかに伊藤への依存が強かろうとも、彼は東北・北海道旅行に際して一時的に雇用したガイドにすぎない。英国を出るときから帯同してきた従僕ではない以上、Bird の同行者ではない。その意味で Bird は独り旅である。そもそも、南極大陸のような人外境を単独行する場合以外、物理的に完全に独りになる旅はありえない。期間の長短、関係の厚薄はさまざまであろうとも、他人との交渉は必ず生ずる。だからこそ、その関係を見る旅行者の眼が問われる。井野瀬 (1998, p. 64) は19C のレディトラベラの共通項の第一を「女性のひとり旅」とし、これは白人の同行者がいないことであり現地人のガイド・通訳・荷役は当然帯同していたと付記している。しかるに中野氏は第6章注15でこれに言及しながら肝心の「ひとり旅」を欠落させた。いまだにそうした問題の存在が理解できないのであろうか¹⁵⁾。
- ⑤ ガイドブックについて：本書第5章 (特に pp. 122, 124) では、ガイドのない単独行とガイドブックとの関係が強調されている。しかしサトウ (1996, pp. 20, 22, 33, 35) に明らかなように、このガイドブックはガイドや人夫などの雇用を前提にしている。ガイドブックは団体旅行でも使用された (的場, 2001)。ガイドブックにより単独行をおこなった旅行者もいるであろうが、大勢とは言えないのではなかろうか。また中野氏自身が紹介した Satow のガイドブックの価格の変遷などからも明らかなように、その利用者は『地球の歩き方』の利用者とは社会階層が違う。比喩とはいえ『地球の歩き方』を持ち出すのは失当である。
- ⑥ 「ハソネの法則」なるものが呈示されている。すなわち、ハードウェア・ソフトウェア・ネットワークの3者が「バランスよく進展する」(p. 216) ことで観光地化が初めて進展するという。しかし「バランスよく」の操作的定義がなされない限りこの「法則」に経験的意味はない。さらに、ホテルはソフトとハードとが合体したものだということのように二つの要素の合体を認めてしまえば、3者に分けての分析は不可能であろう (そもそもハードとソフトとが相互に依存しないで存在することがありうるだろうか)。
- ⑦ 生活の在り方が全く違う社会の間で物価を比較することはさして意味がない。したがってその方法について批判するのもあまり意味がない。しかし、クックの世界一周旅行の価格300ギニーを、当時の日本の物価に換算してから現在の物価と比較するのは明らかにおかしい。300ギニーは英国の社会で設定された価格だからである。産業革命期の中層中流階級の年収は最低200ポンドであった (長島, 1987, p. 145)。本書で論じている時期より半世紀近く前になるが、この間に物価の大幅な変動はないので目安とすることができよう。300ギニーはその1.5倍となる。現在の日本に中層中流階級を設定するのであれば『家計調査報告』における第Ⅲ階層であろうか。そうであればその下限の570万円を、当時の200ポンドに当てることになる。したがって300ギニーは1000万円弱となろう。なお、ガイドの日当を日雇い労働者や大工の賃金と比較している (p. 238) が、これも失当であろう。まともに英会話ができるのであれば実際の経歴はともかく実質的には中等学校卒業以上として扱われてしかるべきであろう¹⁶⁾。

4 むすびにかえて

図1は、British Library のHP で表題に ‘(a) round the world’ という句を含む蔵書を検索した結果を年代別に示したものである。もとよりこの句を含むもの全てが旅行記のわけではなく、また逆にこれを含まない旅行

記もある。とはいえ、書物の題名として、そしておそらくは一般的な言葉としても、この句が19Cの第4四半期にこのなはだ流行したであろうことがうかがえる。‘globetrotter’には地球周遊という概念は必ずしも含まれないようではあるが、筆者としては globetrotter の発生と ‘around the world’ の流行とを関連づけて検討したいと考える。日本における観光行動も、当時人を引きつけたインド・中国・アメリカ西部との関わりのうえで検討する必要がある。

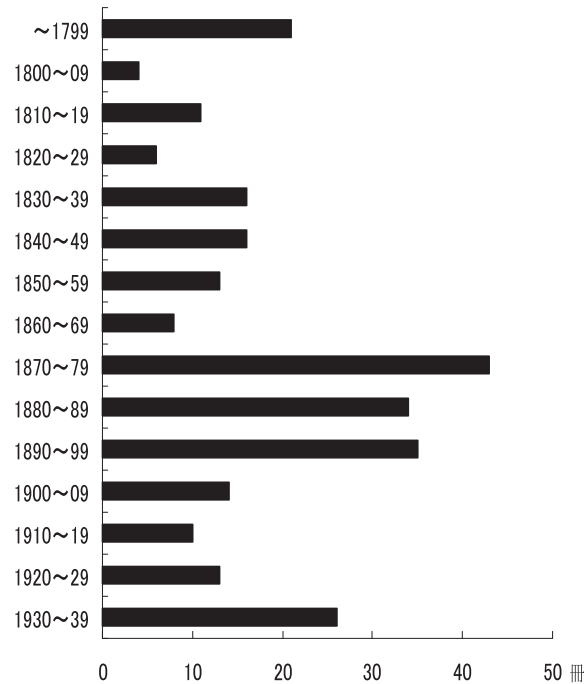


図1 British Library の蔵書のうち ‘(a) round the world’ の句を表題に含むものの刊行年次別冊数

付記：本稿作成にあたり、The Internet Archive (<http://archive.org/>) および鳴門教育大学附属図書館を介して諸機関の文献を利用させていただいた。関係各位にお礼申し上げます。

注

- 以下で「本書」とは中野（2013）を指す。また特に文献名を示さずに挙げた引用は全て本書からのものである。
- さらに、A は A' 選定のために中野氏が「目を通した」史料の集合であるから、明治期訪日者の著作の（観念的な）全集合のなかを、いかなる手段・範囲で探索して A を設定したかが示されねばなるまい。当然、横浜開港資料館（1996）や日文研の「日本関係欧文図書目録」などを参照したのか否かも問題となりうる。中野氏の言う「できる限り幅広く」（p. 16）「手当たり次第」（p. 255）に読むというのは態度であって方法ではない。それにしても、上記「一覧」には3ヶ条の制約付けられており、すでにこの「一覧」が中野氏が手にした（手にしえた）はずの文献の部分集合であることが示されている。実際、たとえば p. 280には国賓として来日した5人が挙名され、彼らが旅行記を書いたことも指摘されている。その一部は明治期に刊行されている（ヤング（1983）・フェルディナント（2005）・Pacific Commercial Advertiser Company（1881））が「一覧」には掲出されていない。その一方で同じ国賓ながら Readesdale（1906）は挙げられている。Grand らについてはすでに知っていたので読まなかったが、Readesdale については実際に「目を通し」て初めて国賓の旅行記だと分かった、ということであろうか（書名を見れば明らかであるから迂闊なことである）。しかも、国賓旅行記の除外は「一覧」の制約条件には含まれておらず、この後の作業として A から A' を選定する際に適用される条件である（後述）から、むしろ Grand らの旅行記を排除していることが誤りなのである。いくら中野氏自身が不十分さを自覚している（p. 255）とはいえモラエス（1969）・ロチ（1953）など邦語訳のある文献すら欠落していることとも併せ、本「一覧」（したがって本書の作業全体）の妥当性を疑わせるものである。

なおこの「一覧」を時期別に集計するに当たって、出版点数が多いことは「その時期に書かれた旅行記が比較的容易に手に入ることを示す（p. 255）と述べている。しかし入手の易難は出版点数ではなく印刷部数の多寡に依存するのであるから中野氏は誤っている。

- 3) 中野氏は B の事例として Duncan (1891) を挙げる一方で、『八十日間世界一周』もその一つだとする。筆者には Duncan の叙述の真実性を判断することはできないが、1888年の世界一周の途上に彼女が日本を訪れたことは確かなようである（横浜開港資料館（1996, p. 48）および <http://www.enotes.com/topics/sara-jeannette-duncan/critical-essays/duncan-sara-jeannette>）。しかし Verne は日本を全く訪れることなく『八十日間』を書いているのであるからそもそも A に該当しない。Verne を挙げることは範疇誤謬である。
- 4) たとえば Schiff は国賓同等だとする（p. 284）。その一方で Kahn については globetrotter と見なしている（p. 293）。Kahn が1897年・1908年の来日において厚遇されたこと（谷, 2011）を看過しているのか、あるいは待遇の差に根拠を求めているのであろうか。
- 5) 史料の利用に関わる不注意な誤りとしてはこの他に、p. 166の引用・言及で「クライネル」とあるべきを2ヶ所で「クライネル」としていることや、第6章注27でやはり2ヶ所、『エゾ地一周ひとりの旅』を『エゾ地一周ひとりの旅』としていることなど、が見受けられる。
- 6) この定義さえ曖昧で無意味である。「あちこち」と「頻繁」とは具体的に何を意味するだろうか。たとえば pp. 259~269で紹介されている Price は、少なくとも当該旅行記の限りでは米国から日本へ単純に往復したにすぎない。彼らはこの前後にヨーロッパないし他のアジアなどに旅行しているのであろうか。世界一周旅行者といえども、空間条件はともかく頻度条件を満たすような旅行をしているのだろうか。
 なお中野氏は、trot が速歩のことであるので globetrotter は「世界を早足で旅行する人」という意味をもつとする（p. 199）。しかしこの速度の観点は globetrotter を規定するうえで全く考慮されない。
- 7) 中野氏が検討したはずの全著作を追試することはできないので、前述の「一覧」に示された旅行記を事例とする。掲出された102旅行記のうち原文を電子データとして入手できた93について、'globe' をキーワードとして検索をかけた。51は globetrotter に対する言及自体がなかった。残りの42のうち、globetrotter を自認していることが明らかなものは12（うち1は B に属す Watson (1904)）、自認しているらしく感ぜられるものは6（うち1は B に属す Duncan (1904)）であり、23はどちらとも判断できなかった（自身が globetrotter ではないことを明言している旅行記はなかった）。「globetrotter」という語を用いずにこの自己規定をしている場合もあるにしても、旅行者の多くが自身について globetrotter であるか否かを表明していないことは確かであろう。なおフィッシャー（2001, p. 11）は、自分の試みた天竜下りについて、月並みな globetrotter の計画にはないことだ、と記述している。中野氏はそれを踏まえて、Fischer は自分を globetrotter ではないと規定していたと考える（p. 306）。しかしこの記述からは、Fischer が自分を優れた globetrotter であると見ていたと解することも可能である。すなわちこの記述だけでは Fischer の自己規程を判断することはできない。他の旅行者の類似の表現も同様である。
- 8) たとえば globetrotter を自認しているらしい Crow（クロウ, 1984, p. 1）の職業は判然としない（武田(1984) は彼について、商人であることと RGS 会員であることと以外は不明であるとする。中野氏が彼を globetrotter 業者であると考えた根拠は示されていない。もし RGS 会員であることのみを根拠としたのであれば、当時の RGS 会員の性格（Stoddart, 1988, p. 61）を誤解したことによる誤断である。
- 9) 中野氏は前述の「一覧」のファイルの中で、この「一覧」を「[明治期に日本を訪れたグローブロッターの旅行記で明治時代に出版されたもの]の書籍の一覧」と説明している。しかしそれは二重に誤っている。一つには本文中で述べたように、そこに挙げられた旅行者のほとんどについて globetrotter であることが確認できないからである。もう一つは、この「一覧」は B に属する Duncan (1890) や Watson (1904) を含んでいるからである。
- 10) 中野氏は、「旅をする本来的な目的」を「多くの物事を自分の目で確かめ、自分の個人的な体験にする」ととする（p. 324）。それならば、旅は本来的に多目的にならざるをえない。単一の目的しかもたないと自覚できる旅行者は錯覚しているか、さもなければよほど単純に冒険のみを求めているのであろう。
- 11) 注7) で指摘したように、旅行者の多くは明示的に globetrotter を自認していないのであるから、中野氏のこの判断は誤りではないが意味がない。ちなみに、中野氏は Tyndale を「旅それ自体とは異なる目的」をもつ旅行者の典型と見なす（pp. 295~300）。しかし彼は日本商人について論じた一節で、横浜では生活必需品が外国人には日本人によりも高く売られる、そして globetrotter は外国人居留者よりも高く骨董品を買わされ

- る、と述べている (Tyndale, pp. 215~216)。Tyndale が自己を globetrotter に含めているか否かは明らかではないが、この文脈では globetrotter は一般の旅客とほぼ同義であり、Tyndale が globetrotter と自己規定していたとしても不思議ではない。
- 12) さらに、Price が、「1 ヶ月も時間があるのなら、もう少し別の場所にも行けばよかった」(p. 271) と批判されていることからすると、真の globetrotter も成功量の多寡に応じた評価がさらに下されるのであろう。
- 13) この Netto の記事の訳文はチェンバレン (1969) でも横浜開港資料館 (1997, pp. 40~41) でも「〇〇型グローブロッター」と訳している。しかし Netto は学名をもじっているのであるから、「グローブロッター属〇〇種」と訳すべきであろう。また Netto が第一に挙げている communis 種について、チェンバレン (1969) は「通俗型」、横浜開港資料館 (1997, p. 40) は「一般型」と訳している。しかしこの種は、「友の友は友」「あなたのものは私のもの」といった厚顔な輩を指しているのであるから「社交種」または「共産種」と訳すべきだと考える。
- 14) ただし pp. 13~14 に引用したデルマーは注記を欠き、p. 35 の注18 に引いた 5 文献では引用元ページ数の記載を欠くなど、欠落も少なからずある。またサトウの日本通であることに関して、典拠を示さずに「日本のことでわからないことがあれば、日本人でさえサトウに尋ねなさいと言った」と記す (p. 135)。典拠はバード第 3 信原注であろう。
- 15) いうまでもなく、伊藤に対する Bird の眼差しは彼女ないしはレディトラベラ特有のものではなく、階級関係のある社会には通有のことであろう。東に下る在原業平が「友とする人ひとりふたりして」(『伊勢物語』岩波文庫, p. 13) 出かけたといつて彼と同輩の貴族だけで旅行するはずがなく、有力な法官の家に生まれた (家島, 1996) イブンバツータが「ただ一人の旅立ち」(『大旅行記 1』東洋文庫, p. 36) だからといって奴隷・従僕を伴わないはずがなかろう。
- 16) たとえば 1901 年の小学校教員の初任給は月 10~13 円であり、大卒の銀行員初任給は明治 30 年代は月給 35 円であった (週刊朝日, 1981, p. 19; 週刊朝日, 1982, p. 69)。毎日仕事があるならばガイドは小学校教員よりも高収入を得られるが、それでも大卒行員には初任給にさえ及ばない。

文 献

- 青木枝朗 (1997) 解説。ウェストン『日本アルプスの登山と探検』岩波書店
- 井野瀬久美恵 (1998)『女たちの大英帝国』講談社
- クロウ (1984)『クロウ日本内陸紀行』雄松堂出版
- サトウ (1996)『明治日本旅行案内 上巻<カルチャー編>』平凡社
- 週刊朝日編 (1981)『続・値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社
- 週刊朝日編 (1982)『続続・値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社
- 武田万里子 (1984) 解説。『クロウ日本内陸紀行』雄松堂出版, 325~336
- 谷 博美 (2011) アルバール・カーンと「地球映像資料館」。徳島地理学会論文集 12, 41~63
- チェンバレン (1969) 世界漫遊家。『日本事物誌 1』平凡社, 268~271
- 近兼拓史 (2012)『80時間世界一周』扶桑社
- 中野明 (2013)『グローブロッター 世界漫遊家が歩いた明治ニッポン』朝日新聞社
- バード (2000)『日本奥地紀行』平凡社
- フェルディナント (2005)『オーストリア皇太子の日本日記-明治二十六年夏の記録-』講談社
- ホーム (2011)『チャールズ・ホームの日本旅行記-日本美術愛好家の見た明治』彩流社
- 的場昭弘 (2001) 19 世紀の旅行ガイドブックドイツ人から見た旅行ガイドブック。宮崎揚弘編『続ヨーロッパ世界と旅』法政大学出版局, 301~327
- モラエス (1969) 極東遊記。花野富蔵編『定本モラエス全集 1』集英社
- 家島彦一 (1996) 解説。イブンバツータ『大旅行記』平凡社, 354~403
- ヤング (1983)『グラント将軍日本訪問記』雄松堂
- 横浜開港資料館編 (1996)『世界漫遊家たちのニッポン-日記と旅行記とガイドブック-』横浜開港資料館
- 吉田友和 (2011)『12日間世界一周!』角川書店
- ロチ (1953)『秋の日本』角川書店

- ロングフェロー (2004) 『ロングフェロー日本滞在記 明治初年, アメリカ青年の見たニッポン』 平凡社
- Bly, N. (2008) *Around the world in seventy-two day*. Dodo Pr.
- Duncan, S. (1890) *A Social Departure*. D. Appleton
- Foster, A. (2002) *Around the world with Citizen Train: the sensational adventures of the real Phileas Fogg*. Merlin
- Griffith, W. (1876) *The Mikado's empire*. Harper
- Kroeger, B. (1994) *Nellie Bly*. Times Books
- Laird (1875) *The rambles of a globe trotter in Australia, Japan, China, Java, India, and Casmere*. Chapman & Hall
- Leyland, R. W. (2010) *Round the world in 124 days*. Nabu
- Netto, C. (1888) *Schmetterlinge aus Japan*. T. O. Weigl
- Pacific Commercial Advertiser Company (1881) *King Kalakaua's tour round the world*. Pacific Commercial Advertiser Company
- Readesdale (1906) *The Garter Mission to Japan*.
- Simpson, W. (1874) *Meeting the Sun* Longmans, Green, Reader & Dyer
- Stoddart, D. (1988) *On Geography*. Blackwell
- Tyndale, W. (1910) *Japan and Japanese*. Macmillan
- Watson, G. (1904) *Three Rolling Stones in Japan*

A review for A. Nakano's *Globetrotter*

TATUOKA Yuuzi

(Keywords : globetrotter, travel writing, Meizi Era)

In his *Globetrotter*, A. Nakano checked travel writings by globtrotters, and attempted to clarify how their travels were in Meizi Japan and to classify globaltrotters according to their travel styles. His standard of selecting travel writings to be checked is vague. He tacitly supposes a true globtrotter to be professional adventurous travel writer. He shows some examples of globetrotrrs' travels, which are not peculiar to globetrotters. He classifies globetrotters into two types, one travels for itself, and one travels with multi purposes and is unhappy inevitably. The 4th quarter of the 19th cetury showed outbreak of travels among ordinary people. Examination of their travels and extensive comparison is necessary.